

## 審査の結果の要旨

論文提出者氏名 茅野大樹

茅野大樹氏の論文「関係性の表現 ヴァルター・ベンヤミンとモノドロジー」は、二十世紀の批評家ベンヤミンの思考をその認識論に焦点を絞り、かつその独自性を近代ドイツの哲学者ライプニッツのモノドロジーとの関係から解明したものである。ベンヤミンの認識論は前期思想の集大成である『ドイツ悲劇の根源』の「認識批判序論」に結実しているが、難解を極めるその核心は先行研究によっても未だ十分に明らかではない。茅野氏は、「認識批判序論」の一節「モノドロジー」に「理念はモノドである」との命題とともに刻まれたライプニッツ形而上学とベンヤミン認識論との関連が、決して唐突なものではなく、初期以来、目立たないが一貫したものであること、前期ベンヤミンの新カント派、ロマン主義、ゲーテらとの対話において常にモノドロジーの解釈が問題になっていたことを指摘する。そしてベンヤミンの認識論（言語哲学、芸術哲学、歴史哲学を含む）の核心に、モノドロジーの受容から想を得た「関係性」Relation, Beziehung の原理が存在することを明示する。

第一章では、カント哲学の直観と悟性の二元論を受け入れていたベンヤミンが、新カント派とくにマールブルク学派の影響で経験と認識の連続性を強調するようになる過程で、マールブルク学派におけるライプニッツ主義の影響を受けていたことが示される。ベンヤミンはコーヘンから、悟性的思考により認識のあらゆるアプリアリを構成する一元論を学ぶが、微分法を中心とするライプニッツの数学の体系を評価して形而上学を認めないコーヘンとは袂を分かち、すでにモノドの形而上学に接近している。また、ヘルダーリンの二編の詩を論じた論考で、詩作品の本質である「詩作されたもの」を、主観的要素を排した「関係性の全体構造」と捉えるが、そこにはライプニッツの「モノド」を「実体」ではなく「機能」とするカッシーラーの解釈の影響が明白である。本論文は、ベンヤミンが新カント派から批判的に受容したものを、単にカント認識論の解釈においてでなく、従来ほとんど注目されてこなかった新カント派のライプニッツ解釈の中に見定めようとする。

第二章では、ベンヤミンのロマン主義論におけるシュレーゲルおよびノヴァーリスについての議論が検討される。茅野氏によれば、ベンヤミンがシュレーゲルから受容する「思惟の自己関係としての反省から思惟内容が無限に産出される」という認識モデルは、シュレーゲルが芸術作品の構造を、宇宙の生きた鏡として世界全体を表出するライプニッツの「モノド」に見立てたところに由来する。他方で、ベンヤミンはまさにモノドロジーの解釈をめぐるロマン主義から距離を取り始めると茅野氏は指摘する。ライプニッツの「モノド」は、自己自身に閉じており「窓を持たない」とされるが、シュレーゲルは個々の芸術作品の断片性が無限の反省によって一つの芸術の理念へ統合されると主張する。これに対してベンヤミンは、個々の芸術作品の独自性を唯一の芸術の理念に全体化することなく、個々の作品が

それぞれ芸術の理想を体現するものとするゲーテの古典主義に与する。茅野氏はここに、孤立した複数の視点から世界を表出する非連続の「星座」的布置として理念を解釈する、「認識批判序論」のベンヤミンのモノドロジイ的理念論の基礎を見出す。

第三章では、ベンヤミンとゲーテのライプニッツ解釈をさらに詳細に検討することで、今度は両者の重要な差異が明らかにされる。ゲーテの自然科学(形態学)の中心に位置する「原現象」Urphänomen の概念は、無限に形態を変化させながら常に同一であるような自然の内的形成原理を意味するが、ゲーテはこれを具体的な自然の中に直観されるものとしたのに対して、ベンヤミンはこれをプラトンのようなアイデアに近く解釈し、自然にあっては直観不可能でありながら芸術作品の内に潜在的に表現されうる「理念」としてとした。茅野氏はここに、現象においては隠されているが歴史を通して解読されるべき潜在的な「関係性」としてのモノドロジイ的な「理念」という「認識批判序論」の思想の原型を見出す。そして「ゲーテの『親和力』」において、ベンヤミンが小説の表面からは隠された作品の「真理内実」として「不死性」の理念を取り出していることを具体的に示して見せた。

第四章では、『ドイツ悲劇の根源』の「認識批判序論」とその本論であるドイツ・バロック悲劇論の解釈に進む。前章までの考察でその発展過程を明らかにしたベンヤミンのモノドロジイ的認識論が、「認識批判序論」における現象と理念の関係に実現していると茅野氏は論じる。互いに独立して触れ合うことのない恒星同士の布置が星座を構成するように、現象の諸々の要素が異質なままにその「関係性」によって隠された理念を表出するという構造は、相互に独立して世界を表現する実体同士の「予定調和」というモノドロジイの構造に対応する。バロック悲劇の解釈は、過去から未来にわたる宇宙の歴史の全体を潜在的に内包するモノドロジイ的時間という概念によって可能となる。バロック悲劇に現われる歴史、悲しみの感情とメランコリー、アレゴリー的言語という三つの主題を貫いて、理念と現象の「表現」関係が確認されることが示される。

本論文は、以上のようなベンヤミンの認識論の発展とその核心を、関連する膨大な文献のきわめて周到かつ精緻な読解によって論証しており、その質の高さは瞠目すべきものである。前期ベンヤミンの著作群の諸所に見え隠れしながら主題的に論じられることのなかったライプニッツのモノドロジイとの関係に着目し、それがベンヤミン認識論の成立過程の決定的な場面で重要な役割を果たしていることを論証した本論文は、ベンヤミン研究のみならず西洋思想史及び現代思想の分野に対する大きな学術的貢献として評価される。審査員からは、ベンヤミン研究で重視されてきたユダヤ思想やマルクス主義への目配りも欲しかった、ゲーテの読解はより深める必要があったのではないか、ライプニッツの「予定調和」は「最善説」と一体であり、「没落」を強調するベンヤミンの歴史哲学と対極にあるのではないか、等々の指摘がなされたが、これらは本論文の豊かな達成をいささかも損なうものではなく、今後の課題とすべきことも確認された。

したがって、本審査委員会は、博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。